

あとがき

著者	久保 正敏, 堀江 保範
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	126
ページ	495-496
発行年	2015-02-27
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008953

あとがき

本書の編纂は、編著者の両名にとって10年来の懸案であったが、ようやく宿題を果たせた感がある。

バウインガ・アボリジナル組合 (Bawinanga Aboriginal Corporation, BAC) 議事録については、既に小山修三編『オーストラリア研究資料 I : マニングリダ・バウインガ・アボリジナル・コーポレーション会議録』(科研報告書) が1991年3月に公表されているが、それは1978年から1984年までを扱ったものであった。このたびは、その後も入手できた議事録と合わせて刊行することで、BACの20年弱を通覧できる資料を公表しようと考えた。ただし、1984年までを扱った前書では十分な参照資料を入手していなかったのに対し、1985年以降の議事録の解釈については、その後に入手したBAC宛ての各種書簡や設計図面、MPA 議事録やBACと対抗関係にあるマニングリダ評議会議事録のほかにも、キャンベラにある国立アボリジニ・トレス海峡諸島民研究所 (Australian Institute of Aboriginal and Torres Strait Islanders Studies, AIATSIS) からマニングリダ地元紙『ミラージュ』のアーカイブズ資料など、様々な資料を収集・参照しながら1985年以降の注記を作成したため、1984年までの議事録の注記と以降のそれとの間には、質的な差があることも、ご容赦願いたい。『ミラージュ』については、久保正敏編の『先住民社会文化のダイナミズムとオーストラリア行政の歴史に関する文化人類学的研究』科研報告書 (2002年3月) にて既に概要を示してあるほか、現在ではAIATSISの下記のウェブサイトから閲覧可能である。

<http://www.aiatsis.gov.au/collections/exhibitions/maningrida/home.html>

人類学プロパーではない我々編著者両名は、マクロとミクロ両視点の接合をねらい、いわば、「ミクロ→マクロ往還」「木を見て森も見る」という方針で、これら資料の収集に努めてきた。この方針の背景には、2014年10月刊『季刊民族学』150号「対談 チーム・オーストラリアものがたり」でも触れられているように、小山修三氏の組織した民博オーストラリア・アボリジニ研究グループ参加メンバーの専門分野の幅広さがあった。異分野の視点が混じり合うことで新たな発見が生まれる、という共同研究の組織原理は、国立民族学博物館初代館長・梅棹忠夫氏の基本理念であったが、本書のねらいの原点もそこにあると思う。

本書では十分な解析に至ってはいないが、様々なインフラ整備の結果、生活パターン

に変化が生まれている。例えば、第Ⅲ部P-4-6の図で明らかのように、O/S（アウトステーション）運動の初期にはO/Sの拡散と増加、そして頻繁な改廃が見られるが、道路網が整備されるにつれ、生活に便利な主要道の近くにO/Sが収斂していく。また、かつては、死者が多いとそのO/Sを廃棄する、簡単な掘り抜き井戸の水の出が悪くなるとO/Sを移動する、などの事例が多かったのに対し、半永久的で便利な住宅が建てられ道路が整備されるにつれて、便利な場所に定住して住居の移動はかえって避け、かわりに墓地をO/Sから離れた場所に設けるなど、文化的な側面にも影響を及ぼしているようだ。インフラ整備に伴って、拡散と流動性の高いO/Sから、定住的・固定的なO/Sへと変化してきた、と言えよう。実際、BAC1983年9月の総会でも、O/S住宅建設にからめて今後は定住化を薦める、との議長発言が見られる。こうした、インフラ整備と生活レベルでの相関関係、いわば、マクロとミクロの相関関係の分析は、今後の課題としたい。

より快適な住環境が整うと、その維持管理における女性の役割が大きくなっていく。総じて、儀礼活動に熱心なために勤務先を長期欠勤しがちな男性に比して、儀礼での役割がより少ない女性は勤勉で着実に事をこなしていく。狩猟採集が生業であるとされていた時代でも、見かけは派手な狩猟には空振りが多く、女性が担う採集こそが着実な栄養源をもたらしていた、従って採集狩猟と呼ぶべきだ、という議論と相通じる。インフラ整備に伴い、アボリジニ社会の将来には女性の役割がますます大きくなる予感がある。

長年にわたって我々がマニングリダのO/S地域に入域でき、BAC事務所などから本書の元となった多くの資料を入手できたのは、幾度も登場するD.ボンド氏と小山修三氏の信頼関係があってこそ可能であった。ボンド氏はもはやBACを退職し、今や、アボリジニの人びとや関係者とのコネクションを持たない研究者がこの地域に入ることは、かなり難しい時代である。それを思えば、我々の調査時期は実に幸運な時代であったと言えよう。

私的なことを述べさせてもらおうと、この20年近くの間、マニングリダへの往還の仲間との道中、特に編著者両名と小山修三氏の三名でのランクル旅は、まことに楽しい、青春の思い出であった。また、本書のために写真資料を渉猟する際には、できるだけ民博オーストラリア・アボリジニ研究グループが登場する写真を選ぶことを心掛けたが、どの写真についても思い出がつきまとい、本書の編集作業は、一種のセンチメンタル・ジャーニーでもあった。

最後になるが、あらためて同グループの仲間たちに感謝するとともに、作図や原稿清書で大変お世話になった、藤田京子氏にも深謝したい。